みなと物語

大阪港のはばたき

物流の拠点から観光スポットへ

台風で被害を受けた大桟橋
（なにわの海の時空館提供）

明治30年（1897年）に始まった築港工事。昭和12年（1937年）には貨物取扱量が日本一となるなど、大阪港は物流の拠点として大きく発展しました。しかし、築港工事の歩みは水害との戦いの連続でもありました。昭和9年（1934年）の室戸台風、昭和20年（1945年）の枕崎台風、昭和25年（1950年）のジェーン台風などでは、高潮により区内の広い範囲が浸水しました。また、昭和20年（1945年）の大空襲では、大阪港一帯が壊滅的な被害を受けました。度重なる水害を教訓にして防潮堤や水門の整備、大規模な盛り土工事など、水害に強い港づくりが進められてきました。

大阪世界帆船まつり（セイル大阪提供）

昭和40年代後半に南港が完成すると、重要な港湾機能は南港へと移りました。天保山地域のかつてのにぎわいは影を潜め、その反面、みなと大橋や地下鉄の開通などアクセス面での利便性が徐々に整えられました。昭和58年（1983年）に開催された大阪世界帆船まつりでは、各国から10隻の帆船が参加し、パレードや船内公開など多くの人々を魅了しました。また、平成2年（1990年）には海遊館やマーケットプレースがオープン。サントリーミュージアム［天保山］や大観覧車、宿泊施設などが次々と開業し、大阪の一大観光スポットとして生まれ変わりました。天保山岸壁には各国の豪華客船も寄港します。大阪港は、国内外の観光客を華やかに迎える「大阪の海の玄関口」となりました。

魅力あふれるベイエリア（海遊館提供）